

〔研究ノート〕

「夜半翁画ハ古潤ノ意ヲ取ニ似タリ」—画僧古磔の水墨画をめぐって—

先般開催された『特別展 没後300年 画僧古磔』は、著色された大画面の仏画、長大な絵巻、水墨画、さらには版本挿図という、多岐にわたる古磔(1653~1717)の画業を紹介するものでした。中でも水墨画は愛らしい大黒天図の他、市井の人々の様子を活写した風俗画に見所があり、古磔の画風を考える上で重要な作品群です。例えば「四季耕作図」(奈良県立美術館蔵)は、季節とともに移ろう農作業の様子を描いた作品で、画面下部より、田起こし、田植え、竜骨車を用いた灌漑、稲刈りの順に描かれます。田起こしの場面で描かれる牛の描写に注目すると(図1)、古磔の描く大黒天図にしばしば見られる牛の表現と、造形や墨線、階調の用い方、筆運びが一致しますが、これは、海北友松筆「牧牛図屏風」(個人蔵)に類似する表現を見出すことが出来ます(図2)。古磔と同時代に活躍した鑑定家、浅井不旧が著した『扶桑名工画譜』によれば、古磔は海北友松の子、友雪(1598~1677)に絵を学んだことが記され、画風の淵源が友松の絵にあったことが窺えます。また、「雲龍図屏風」(薬師寺蔵)に描かれた龍の描写には、同じく友松の描く龍と共通する要素が認められ、つばらな瞳を表す点は雪村の描く龍との親近性も感じられます。さらに、「山水図屏風」(本家菊屋蔵)に見られる太い濃墨を用い、○、△、□という単純な形を組み合わせるモチーフを描く点は、雪舟や雪舟

流と呼ばれる画系の作例に、類似する要素を見出すことが出来ます。一方、古磔の描く大黒天図の愛らしい画趣は、石清水八幡の社僧であった松花堂昭乗(1584~1639)の描く布袋図に見られ、先行する「画僧」の作例を懸命に学んだことが窺えます。すなわち、古磔の水墨画には、手本とした先行する作品の画風が素直に表れており、画風の憑依というような現象が起きているのです。独自性への意識はあまり感じられません。ここには、仏画を描く職業画家としての「画僧」であるという意識が強く働いていたのではないかと思われま

す。「画僧」は文字通り「僧侶である画家」という意味ですが、日本絵画史の中では周文や雪舟に代表される、水墨画を専らとして専門的な画技を備えた僧侶、というのが狭義であり、水墨画受容以前の画僧とは性格が異なります。すなわち、平安・鎌倉時代の画僧は著色された仏画の制作者であり、顔料に関する知識を備えた点で、絵仏師とその役割は変わりません。文献史料においても「画僧」という言葉ではなく「絵師法師」「絵阿闍梨」「絵師僧」といった言葉が用いられるのです(平田寛「画僧について」附画僧研究史料(稿)』『南都仏教』67、1992年)。

「画僧」として古磔を見た場合、浄土曼荼羅や祖師像を中心とした著色仏画を制作する一方、山水・人物という画題も含んだ水墨画を数多く遺している点は注目されます。

また、単なる技術のみを持っていたわけではなく、先行する作例や図像の知識、それらを再構成する能力も持ち合わせていたと思われます。例えば「大経(無量寿経)曼荼羅図」(浄国院蔵・図3)や「阿弥陀経曼荼羅図」(太宗寺蔵)のように、直接参照したと考えられる先行作例が認められない作品では、当麻曼荼羅の構図をもとに「刺繡釈迦如来説法図」(奈良国立博物館蔵・図4)に見られる群像圍繞形式や、「観経十六観変相図」(阿弥陀寺蔵)の如来形と対座する僧侶・菩薩の姿といった先行する作例を参照し、新たな図像を創出しています。「画僧」古磔の特質は、水墨画の受容以前と以後で受容する「画僧」の性格、その両者を備えた点にあるのではないのでしょうか。ただ、先に述べたように、仏画を描く職業画家としての画僧という意識が強いように思われます。それは、古磔の水墨画に見られる、肥瘦や勢い、擦れ、濃淡を駆使した自由な描線というよりも、ゆっくりと筆を置きにくい丁寧な描線に表れています。つまり、仏画を描くのに近い描法で、水墨画を描いています。このような古磔の意識が、画僧の中での独自性を際立たせ、結果として特有の画趣を生み出しているのだと思われま

す。憑依された画風は古磔以後の画家にとっても親しみやすく、影響を与えたことが考えられます。例えば「人物画卷」(奈良県立美術館蔵・図5)に見られる略筆に淡彩を施す表現は、一見して与謝蕪村(1716~1783)の俳画に見られる人物に類似することが分かります。本作品が古磔の手になるのか、慎重に検討する必要がありますが、

両者の描いた絵画の親近性については渡辺華山(1793~1841)が指摘しています。俳画法について華山の見解が記された『華山俳画譜』に、蕪村の絵を写すとともに「夜半翁(蕪村)画ハ古潤ノ意ヲ取ニ似タリ」とあるのです(図6)。蕪村は古磔の亡くなる前年に生まれています。一方、古磔の同世代には英一蝶(1652~1724)、尾形光琳(1658~1716)、浄瑠璃・歌舞伎作者として著名な近松門左衛門(1653~1724)がいます。元禄から正徳という時代に活躍した古磔は、中世と近世後半を繋ぐ橋渡しのような存在でした。未だ「中世」の残響・余韻の感じられる時代であったことが、画僧古磔を生み出す最も重要な要素だったのではないのでしょうか。

(古川攝一)

※図2は特別展『海北友松』図録、京都国立博物館、2017年、図4は特別展『大遣唐使展』図録、奈良国立博物館、2010年、図6は常葉美術館編『定本・渡辺華山』第II巻／手控編』郷土出版社、1991年より複写致しました。

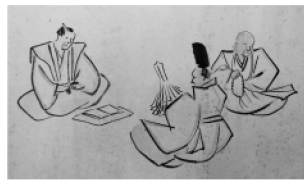


図5



図1



図2



図3



図4



図6

季刊 美のたより No.199

平成29年 6月 30日

発行 大和文華館